

# Humanity & Nature Newsletter



●特集—2  
研究プロジェクトより——06

黄河治水史序説

黄河プロジェクト | 木下鉄矢

●特集—3  
地球研フォーラム——08

森の思想を未来に生かそう

第5回地球研フォーラム実行委員長 | 秋道智彌

地球研だより——10

運営会議/招へい外国人研究者/東夫人よりご寄付/

第13回市民セミナー/環境経済学世界大会に地球研ブース設置/  
いなえ水辺環境学サロン

出版物紹介——11

『子供たちに語る これからの地球』

お知らせ——12

国際シンポジウム「水と人間生活」/公開講演会「水と未来可能性」/  
写真コンテスト「いのちの水」/市民セミナー/「人と水」連携塾/  
上賀茂だより

no. 4

1 October 2006

目次

巻頭対談——02

文をなして明るい未来可能な地球環境学を

総合地球環境学研究所所長 | 日高敏隆

京都大学副学長 | 横山俊夫

●特集—1  
研究プロジェクトより——04

気候変動が農業システムに及ぼす影響を  
「思考実験」する

トルコプロジェクト | 長野宇規



## あや



權







知識と言葉が、暮らしの作法としても根を下ろすことになるかもしれないと思っています。

**日高** そうですか。素晴らしい志ですね。そういうものが本当に必要です。——そういうのを地球研でもぜひ出したいと思っていたのですが。

**横山** これはかつての大学の紀要のようなイメージではとらえておりませんし、世界のどこから投稿されたものでも、国際査読を経て載せる、開かれたメディアでなくてはと思っています。地球研の研究成果を出すときのメディアのひとつにもなると考えていただければ嬉しいです。

——ところで、先日の地球研フォーラムを聞きにきていただいたのですね。いかがでしたか。

**横山** 一見小さな課題であっても、その人類史的意義を全員が共有しておられるし、議論にチャージがかかっていることからくる緊張感を楽しめました。それと、問題は善と悪というような単純なものではなくて、また研究者も単なる観察者ではなく、環境の構成要素であり、一定の習慣や意志を持って環境にかかわっているということを、それぞれが自覚して議論しておられることが印象的で、新しい研究態度として、興味を持ちました。

**日高** やっとそういう時代になったのです。昔は、研究者は対象とは別の存在として、外から見ていたんです。対象の中に入ると研究の値打ちが落ちる

と言われたのです。科学は客観的なものでなければならなかった。論文のスタイルもそうでした。

**横山** 理科系では、とくにそうだったでしょうね。

**日高** 昔の論文は、まずイントロダクションで課題を客観的に書くわけです。なぜ自分がそれに取り組むに至ったかではなくて、次に実験観察の材料と方法を書く。次にその結果を出す。それはどういう意味があると思うのかは、あとからディスカッションのところに書くわけです。そういうアメリカの科学論文のスタイルになじめなくて、私は学位論文をフランス語で書いたのです。なぜかというとき当時最先端だったフランスの昆虫ホルモン研究は、逆に非常に古い表現スタイルをとっていて、こういう現象に自分は疑問を持った、それを解明するためにこういう実験を試してみた。そうしたらこういう結果が出た。これはたぶんこういうことなのだろう。そういう書き方なのです。

**横山** それで、どうになりましたか。

**日高** 先生がフランス語を直す自信がなかったらしくて、「少し冗長のような気もするけれど、まあいいだろう」と、通してくれた（笑）。以来、私はずっとそういうスタイルでやってきたので、近年、環境研究のスタイルが、単純な客観的・「科学的」なものから、研究者自身の問題意識や関わり方を重視するように変わってきたことは、私にはとてもなじむのです。

**横山** 地球環境学という看板のもとでは、たとえ個別の現象を扱っていても、因果関係が地球規模に全部繋がっていて、そのうちどれを取り上げるかという時に、まず研究者の知識だけでなく、センスや想像力までが試される。ですから先日の地球研フォーラムのような、いわば研究者の人格も前面に出してなされる方法に期待が持てます。

——横山さんは江戸時代の生活の智慧といったことの研究をされていますね。

**横山** 『節用集』や『大雑書』という江戸時代の百科事典が各地に残っていますが、それらのどのページがよく傷んでいるかを調べ歩いて、工業化に向かう前の人々のこだわりようを見直そうとしているのですが、当時は陰陽道が強いんですね。天にも地にもいっぱい神様がいて、日選び方選びが大変でした。真剣さは実のところ様々でしたが、全体としてはそれなりにうまくいっていた。賢くつきあえばご利益があり、まちがえば大いに災いとなる人工物をたくさんそろえてしまったのが今の環境問題ですが、それを考えるときに、かつての神々への智慧のはたらかせようが、ヒントになるかもしれません。

**日高** そうですね。これ以上あまり自然を触るなどか。人間というのはもともとそういう感覚も持って考えていたのでしょうか。それが、0でなければ1、1でなければ0と、パシッパシッと分けていくほうが知的だという具合になってしまったので、何も恐れずに自然を改造していくようになったのではないのでしょうか。

**横山** そういう気がしますね。

——きょうは、ありがとうございました。

2006.7.10

地球研「はなれ」にて。

聴き手：斎藤清明

【撮影：二村春臣】



今年は梅雨後半の豪雨により、夏野菜の価格が一時高騰しました。1993年には冷夏の影響で米が不作となり、外国産米が緊急輸入されたことを覚えている人も多いと思います。翌年に生産量が通常に戻る場合は、これらは「気象変動(異常気象)」で済みますが、同じような傾向がかなりの頻度で繰り返されると、これは「気候変動」であり、産地や生産システムの改変を要する重大な問題です。

水資源開発を伴う大規模な灌漑農業は、「降水の不足」を補って生産性を向上させるものですが、人為であるが故の独特な弱点も持ちあわせています。それは施設の老朽化、社会情勢の変化、「気候変動」など、数十年単位で起こる長期的変化が設計時に十分考慮されていないことです。そしてその将来は維持管理の良否によって大きく変わってきます。私たちのプロジェクトでは、長期的な視点で農業生産システムを人間と自然の相互作用として捉え直すことで、その構造をよりよく理解しようという試みをしています。

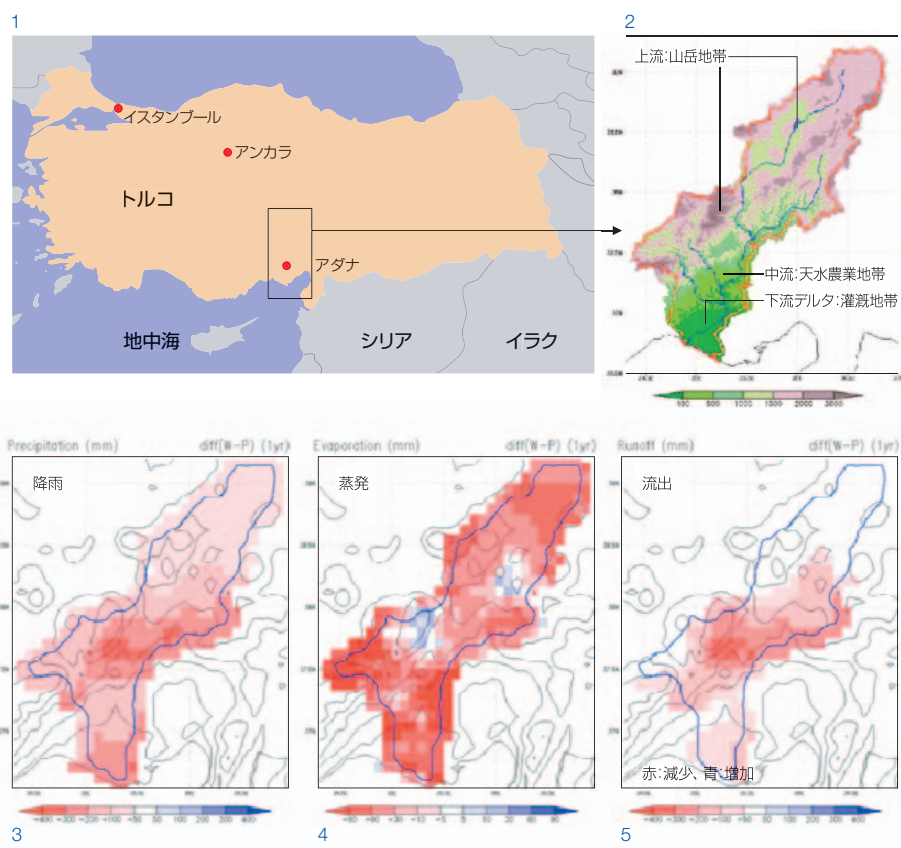
プロジェクトは具体的には、トルコのセイハン河流域の農業が2070年代に想定される気候変動に受ける影響を評価しようとしています。それは科学的な「予測」の枠を超えているので「思考実験」と呼んだほうがいいかも知れません。例えば作物モデルや水文モデルに用いるため、大気循環モデル(GCM)の出力を解像度8.3kmまでダウンスケールしつつ、かつ地上の観測値との整合性を持つ日データの作成を気候専門家をお願いしています。これは気候学の常識からはかなりの冒険で

## 気候変動が農業システムに及ぼす影響を「思考実験」する

■ 乾燥地域の農業生産システムに及ぼす地域温暖化の影響

[通称:トルコプロジェクト]

■ 長野宇規 [日本学術振興会特別研究員]



写真/上—

丘陵部の小麦畑は伝統的風景

[撮影: 中川博視]

図1・2/中—

トルコ全図とセイハン河流域

図3・4・5/下—

セイハン流域では2070年代には、降雨、蒸発量、河川流出量がともに減ると見込まれる

[原図: 田中賢治]





す。また作物の生育についても、試験区での観測に基づいたモデルを広域に適用しようとする、肥沃度の管理などのいろいろな不確定要素に直面することになります。そもそも50年以上先の農民や政府の土地利用についての意思決定を「予測」するのも不可能な話です。そのような「足りない部分」については、研究者間で話し合い、シナリオとして想定することになっています。それぞれ分野の枠を一步踏み越えて未来を見つめようとする、「現在」や「過去」において見落としていたものが分かってきます。

流域の自然植生の分布を調べてみると、それは降水や気温によって規定される潜在的な分布とは大きく異なるこ

とが明らかになりました。それは多くの文明を育んだこの地域ならではの古からの森林伐採や過放牧などが影響しているようです。トルコは小麦の原産地であり、人々の小麦に対する愛着は米に対する日本人のそれと似ています。ところが2070年代にはこの小麦を育む冬季の雨が2割以上減少するという結果が出ました。気温上昇で積雪も大幅に減少するため、水資源への影響も必至です。そこで上流の小麦栽培地が、牧草地に転換される場合と灌漑地に転換される場合の下流への影響を今検討しています。海岸デルタ部の灌漑地は1960年代に開発されましたが、農民は信じられないほど過剰な水利用をしています。それは、当初設定した「管

理」のタガが少しずつ緩んできた結果でもあります。一方で過剰な灌漑が20年以上続いた結果、昔ひどかったデルタの塩害が緩和したという興味深い結果も得られました。

流域に展開する人と自然の相互作用は、研究すればするほど明らかになってきますが、プロジェクトも終了まであと数ヶ月。今は気候変動の影響が大きい相互作用を取り出して、将来の社会変化のシナリオを描いています。このシナリオを基にして参加している研究者の分析結果を紡ぎます。大胆な思考実験と丹念な分析の同居する最終成果としたいものです。



写真／上—

下流の灌漑農地は老朽化が進み、過剰灌漑

[撮影：長野宇規]

プロジェクト「近年の黄河の急激な水環境変化とその意味するもの」のコア研究の一つとして、漢代以来の黄河治水史の解明、特にその巨大治水事業の推進を支えた政治的、思想的背景についての解明を目指している。

中国の河北省、河南省、山東省、安徽省、江蘇省にわたって発達した華北大平原は、鄭州辺りを扇央として東に広がる扇状地、黄河が形成した巨大な扇状地である。黄河は黄土高原を浸食した雨水を集めて南下、華山（主峰2,160m）に突き当たって東に路を取り、北に中条山（主峰2,321m）・王屋山（主峰1,888m）、南に崑崙山（主峰1,903m）を控える山間部を通り、鄭州市北部に至って一気に視界は北・東・南に開ける。ここから黄河は持ち来たった砂泥を吐き出し扇状地を発達させたのである。東方約330km先には泰山（主峰1,524m）などを擁する山東山塊が控えるが、これをはさんで北は渤海、南は黄海に到る平原を広げた。黄河が扇状地の川だと分かれば、それが「暴れ川」であり、洪水と分流の繰り返しを身上とする川であることもよく分かるだろう。しかもそれによって旱作穀物栽培に有利な平原が広がり、有史以来ユーラシア大陸有数の人口密集地帯であり続けた。人が農耕地と住居をこの平原に設け、それが平原ただ中の低地にまで広がった時、この平原を形成して来た黄河の洪水と分流は、人の農耕地と住居を襲う災害となった。しかし人からすれば災害であっても、扇状地とその河川という観点から見れば、それはそうであるしかない事態、すな

## 黄河治水史序説

■ 近年の黄河の急激な水環境変化とその意味するもの

[通称: 黄河プロジェクト]

■

木下鉄矢 [地球研教授]

わち「自然」である。人から見ればこの「自然」は大量の穀実という「利」を与える基礎であると共に、農耕地と住居を破壊する「害」でもある。「黄河治水史」とはこの「利」と「害」のジレンマを技術的にどう切り抜けるかという人間の工夫の積み重ね、その成功と失敗が織り成す歴史の解明である。

洪水と分流の繰り返しを「害」とのみ見て強固な堤防を築き、この「自然」を押さえ込もうとするだけでは、平原の発達と地味の更新という「利」は先細り、また一旦決壊した際の被害を増大するままだに先送りするだけであろう。一方、河水の動きのなるがままに洪水と分流を許すならばそこでの暮らしの安全と生産の安定は図り得ない。

黄河の主要河道は、図のように変遷して来た。渤海へ向かう北流と黄海へ向かう南流に大きくは振り分け、さらに北流では太行山に近い河道から山東山塊沿いの河道まで縦横に動いて平原高を上げ、12世紀に入ってから黄海に向かう南流が主流となった。この時



図/上ー

黄河下流河道変化

期には河道は鄭州以下で分流して淮河に流れ込むことも多く、また東よりに南下する河流と淮河との合流地には黄河の砂泥が堆積して淮河の海への流路を塞ぎ、そこに洪沢湖を発達させた。18世紀後半には、南流側の平原高が一般的に上がり、北流に戻る趨勢が現れて北側への決壊が繰り返され、19世紀半ば、河道は山東山塊の北を行き渤海に達する北流河道に約700年ぶりに戻った。

このような河道の変遷を見ていると黄河が大扇状地と対をなす「暴れ川」だということがよく分かる。そしてまた黄河を、一本の河川としてのみ考えることの間違ひにも気付かざるを得ない。黄河とは果たして一本の河川なのか。それが問題なのである。

自然の趨勢とも言い得るこのような黄河の振る舞いに対し、各時期の王朝政権は様々な対策を実施して来た。なかでも巨大事業としての成果を挙げた治河としては、(A)後漢・明帝・永平12～13年(AD69～70)の王景による大改修、(B)明の嘉靖・隆慶・万暦三帝のもとで4たび「総理河道」(治河担当長官)となった潘季馴(1521～1595)の治河事業、(C)清の康熙帝のもと「河道総督」(治河担当長官)となった靳輔(1633～1692)とその幕僚・陳漢(？～1688)の行った改修事業の三つを挙げることが出来る。

三つの治河事業に共通するのは、それを実施した王朝政権がそれぞれ、漢、明、清というフルスケールで実現した中国型王朝国家の盛期にある政権であったということである。これらの事業を率いた王景、潘季馴、靳輔、陳漢た

写真/右頁一

黄河下流花園口地点の右岸に設けられている護岸





筆者近影

ちはいずれも、その時代の気力の充実を反映して、積極的な事業構想を立て、それを実施する能力を持つ一流の技術家・経営家であった。華北大平原部の黄河の治河が思想的にも物量的にも盛期の国家にのみ許される大事業であるということがよく示されていると言い得よう。

その治河の基本構想、黄河という「暴れ川」をどのように取り扱うのかという基本構想の点では、しかしこの三つの治河事業は大きくふたつに分かれる。すなわちAとB・Cとに分かれる。簡潔にまとめるなら、(A)王景の治河構想は、鄭州市西北の黄河河流に複数の取水閘門を整備し、南東方向に展開し淮河に流れ入る人工流路・汴渠水系に、また同じく鄭州市西北から東に流出し山東山塊の北沿いに渤海に至る済水水系に黄河を分流してその勢いを安定させるというものであった。汴渠水系は黄河から淮河に至る平原部の灌溉・漕運路として整備された。一方、(B)潘季馴の治河構想は、黄河の河水が大量

の砂泥を含むことを基本テーマとして、黄河の流路を一本にまとめ、出来るだけ狭く集中して流勢を上げ、砂泥が堆積して河床が高くなるのを許さない（「束水攻沙」と云う）緊密な堤防機構を組み上げるというものであった。(C)靳輔・陳潢の治河構想は、この潘季馴の構想を受け継ぎさらに全般的に精緻にしたものである。一方は「分流」をもって黄河の力をそぎ、一方は「束流」をもって河床の上昇を防ぐ、という正反対の構想であった。

華北大平原部の河道の安定という点で見ると、王景の構想・施策の方が成功であったと判断される。唐末から五代の時代にかけての混乱により、日常的な改修が怠りがちになったためやがて宋代に入り河道は不安定になったとされるが、それまでの7～800年間、王景の定めた河道はほぼそのまま維持されたのである。一方、潘季馴、靳輔の改修はそれほど持たず、しばしば決壊を起こし、18世紀後半にはすでに山東山塊を北沿いに行く北流への

趨勢が現れ、むしろ人為的に北流に戻すべきだとする意見も当時の吏部尚書（人事担当大臣）孫嘉淦によって提案されている（1753年。実施はされなかった）。

前漢・哀帝の初め（BC6前後）、賈讓は、戦国期以来の開発のため堤防を重ね、田地と住居がその間に入り組んでいる黄河流域の現状に対し、上・中・下三つの対策を提出した。上策は、河流が次にどちらに振れるか、その自然の趨勢を読み、その地域の住民を移住させ、予め人為的に決壊を行って河流をそちらに向かわせる方策。中策は、漕運・灌溉のための用水路を開鑿し河水を細かく分流させてその勢いをそぐ方策。下策は、堤防の高さを増し、厚さを増す方策。しかしこれは結局無駄な努力に終わる下策であると言う。

この賈讓の治河三策は、以後ほぼ2000年の、今日に至る黄河治水史の概要を予見していると言い得るだろう。また広く、強力な自然の変動に対処して人が為す工夫の三つの型式を喝破しているとも見ることも出来るだろう。



## 森の思想を未来に生かそう

第5回地球研フォーラム「森は誰のものか?～森と人間の共生を求めて～」

秋道智彌 [第5回地球研フォーラム実行委員長]



平成18年7月8日、国立京都国際会館で第5回地球研フォーラムが開催されました。今年で5回目をむかえる地球研フォーラムは、地球研における研究の成果を広く社会に発信することを目的として実施されるものです。「地球環境問題とは何か?」、「地球環境問題と私たちの暮らしはどこでどのようにつながっているのか?」などを、具体

的なテーマをもとに市民のみなさんと一緒に考えるための場と位置づけています。

今年は、「森は誰のものか?」をテーマとして地球上における森とその行く末を考えることにしました。温暖化防止条例をめぐる国際会議がおなじ宝ヶ池で開催されたのは、1997年12月のことでした。また、このフォーラムの数日前にもここで世界環境経済学会が開催され、二酸化炭素の排出規制をめぐる活発な議論が展開されました。いまや地球温暖化をめぐる問題は非常に重要な課題となっていることは誰の目にも明らかです。

地球温暖化を防止する有力な手段が緑の保護であることが指摘されていますが、それぞれの地域や国で誰がいったい森を守り、あるいは開発を規制するのかという具体的な問題が浮上しています。フォーラムではこの点に注目して、森をめぐる権利や利害に関する討論を中心におこないました。

パネリストとしては、生態学、熱帯林学、人類学、森林政策などの分野で活躍しておられる6人の演者にご登壇いただきました。森と人間とのかかわりを歴史的に見るとずいぶんちがった側面が明らかになります。地球研の湯本貴和さんは京都を例として、2万年の時間幅で森と人間について考えました。原生の照葉樹林の森は木材や薪木用に伐りとられ、アカマツ林へとかわり、いまやそのアカマツ林はマツクイムシにより枯れ、ふたたび照葉樹であるシイの森にかわりつつあるといえます。

一方、東京大学の井上真さんや地球研の市川昌広さんは、ボルネオのカリマンタンやサラワクの焼畑農耕民と森とのかかわりがここ20年ほどの間に急激にしかも大規模な変化にさらされてきたことを指摘しました。京都大学の阿部健一さんも中国の例をもとに1980年代以降の大きな社会変化が森林のあり方に大きな影響を与えたことを指摘し、現代の研究の重要性を強調しました。

これに対して、京都大学の酒井章子さんは森林生態学の立場から、森を構成する人間以外の動植物が森林を維持してきた機構を紹介し、さらに長い進化の時間幅で森林を捉える必要性を指摘しました。

森林ともっとも深くかわる現地の住民が、外部からもたらされる影響にたいしてどのように対処してきたかは地域ごと、集団ごとに検証する必要があります。市川さんはゴム、アブラヤシ、商品米などの導入により森林の利用形態が大きく変化してきたなかで、森は原生林を開いた個人の権利として







分割せずに相続される慣行が森を荒廃から救ってきたと指摘しました。また、井上さんもカリマンタンの例から、地域住民と政府やNGOsとが連携して森の利用を管理する協治(=ガバナンス)の視点が重要であり、われわれ日本人をも含めて考えれば、「かかわり主義」と「つながり」の観点に注目すべきことを主張され、パネリストのあいだでも共感を得る発言が相次ぎました。

京都大学名誉教授の山田勇さんは、森の所有者と森と日常的にかかわる人

写真／上ー

ランビル・ヒル国立公園【マレーシア・サラワク州】の原生林とその樹冠

が乖離する現代にあって、長く森とかかわってきた地元の人びと、つまり篤林家の知恵と経験に学ぶことが重要と指摘されました。それをうけた議論で、世界の森と地域の森を守るために、新しい共有の思想を広く訴えていくことの重要性を確認することができました。

会場には、熱心な聴講者が200数十名以上集まりました。とくに次世代を担う若手研究者の参加が目立つ場内は緊張と笑いでつつまれ、有意義なフォーラムとなりました。なお、このフォ

ーラムの成果は単行本として昭和堂から本年度中に発刊されることになっています。



写真／上ー

サラワクの先住民イバンによる湿地での稲作

## 運営会議

今年度の地球研運営会議を、6月12日に地球研で(通算第9回)、7月5日に新・都ホテルで(第10回)開催しました。主な審議事項は「次期所長候補者の選考について」。選考委員会を設けて候補者名をあげ、運営会議としての候補者を選考しました。

## 招へい外国人研究者

フィンランドのヘルシンキ大学客員教授のアスコ・パルポラ(PARPOLA, Asko)さんがインダス文字研究をテーマに長田教授のもとで7月から12月末までの半年間 ●オランダのライデン大学客員講師のイローナ・バウシ(BAUSCH, Ilona)さんが縄文時代の交易活動をテーマに内山助教授のもとで7月から1年間 ●トルコからは、チュクロバ大学教授のトゥルハン・ユルマズ(YILMAZ, Tulhan Kemal)さんが7月から3ヶ月間、ハジュテッペ大学助教授のレVENT・テズジャン(TEZCAN, Levent)さんが8月から4ヶ月間、気候と人間活動の影響評価をテーマに渡邊教授のもとで、それぞれ研究されています。

## 東夫人よりご寄付

大津市在住の東朋子さんから5月27日、「国際シンポジウムを中心とする国際交流のために」と、3000万円のご寄付をいただきました。

夫の故・東正彦さんは京都大学生態学研究センター教授だった2000年3

月、カリフォルニア湾で水難事故に遭われました。地球研設立のために先頭に立って活動されていた最中の出来事でした。

新施設ができた今、改めて東さんを偲び、ご寄付を第1回国際シンポジウムに役立たせていただき、ヒガシ・メモリアル・シンポとして催します。

## 第13回地球研市民セミナー

第13回地球研市民セミナーを6月9日に開催しました。湯本貴和教授が「どうなる日本の自然？どうする日本の国土？」と題して、最近の身近な自然に起きている大きな変化について話題提供したあと、参加者との間に活発な質疑応答が交わされました。趣旨は以下のとおりです。

■

シカやイノシシ、サルが畑の作物や果樹園の果物を台無しにしてしまうことが目立つようになりました。かつてはこのような野生動物は人里離れた森のなかに住むもので、めったに人の目に触れるものではありませんでした。このような変化は、はじめは特別な場所での異常な現象として取り上げられ

てきましたが、だんだん日本全国どこにでも起こっている大きな問題であることがわかってきました。この問題は、日本の産業構造の変化に伴うものです。身近な自然こそが、長い期間にわたって日本の農業や漁業を支えてきたのですが、多くの食料を国外に依存するようになってきた今、顧みられなくなってきたのです。しかし、日本の経済的な富はいつまで、世界中から食料をかき集めてこられるのでしょうか。百年の計にたって国民生活を考えるとき、五十年後、百年後の日本列島住民が飢えないようにするために、あるいは他の国や地域に迷惑をかけないようにするために、いまこそ身近な自然を含めた日本列島の自然を守り、回復させる努力を始めるべきではないでしょうか。他国の自然資源に頼りすぎている日本こそが、地球環境問題を引き起こしている張本人のひとりであることを決して忘れてはなりません。



## 環境経済学世界大会に地球研ブース設置

国立京都国際会館で7月3—6日に開催された第3回環境経済学世界大会(佐和隆光委員長)において、地球研では研究活動を紹介する展示を行いました。インド・アイルランド・イギリス・ケニア・中国・シンガポールなど、各

国からの参加者約260人と国内参加者約100人が地球研ブースを訪れ、地球研の若手研究者らは交代で説明。地球研の国際シンポジウムの宣伝もおこない、質問に応えました。5日の夕方には小池百合子環境大臣もブースを訪れ、





地球研の要覧を手にとっていました。

また、同大会のプレナリー講演者、エリノア・オストロム教授（インディアナ大学・政治理論と政策分析ワークショップ代表）は3日午前、地球研の講演室で「制度分析の研究方法を求めて：資源管理制度の多様性からの視点」と題して講演。内外からたくさん聴講しました。琵琶湖―淀川プロジェクトとコモンズ研究会の共催でした。

### いなえ水辺環境学サロン

いなえ水辺環境学サロンを8月5日・6日に、滋賀県彦根市のみずほ文化センターで催しました。平成14年度にはじまった琵琶湖―淀川プロジェクトが主催し、約40人の参加がありました。

彦根市の稲枝地域で取り組んできた共同研究の成果について、ポスター・ビデオ映像などの展示と講演をおりまぜて紹介。地元の住民とプロジェクトの研究者が気取らないで話せるような場―「サロン」―をイメージしての企



画です。魚類の分布を示した地図の前で、魚つかみをした経験を話す人。あるいは、集落の農業経営の分析について説明を受け、農村の将来を語る人。ポスターの前では、熱心な地元の方々との交流を深めました。

6日午後は、谷内茂雄助教授、中野孝教教授、田中拓弥・プロジェクト研究員（以上、地球研）と、脇田健一・龍谷大学教授、山田佳裕・香川大学助教授、石井励一郎・地球環境フロンティア研究センター研究員の6名で「稲枝の水辺と琵琶湖」をテーマにリレー講演。稲枝の水利用や生態系、身近な水辺と琵琶湖への人間活動の影響などについて、それぞれに説明しました。日高所長もかけつけて、あいさつ。最後は、流域の環境を管理する上で、「人と水」「人と人」のつながりの豊かさがとても大切であると締めくくって、盛夏の日のサロンを終えました。



### 出版物紹介

『子供たちに語る これからの地球』

日高敏隆+総合地球環境学研究所 編

2006年7月 講談社 1,365円

「地球環境問題」は多くの人にその重要性が認識されてきています。しかしその一方で、一体何が問題なのかということが、一般的にはよくわからないという現状ではないでしょうか。地球研では、「いわゆる地球環境問題の根源は、自然に挑み支配しようとしてきた人間の生き方、いわば人間の『文化』の問題である」という認識の下に研究を進めてきています。しかし、この表現だけでは「地球環境問題って何なの?」という一般の人たちの疑問は氷解しないと思われます。そこで本書では、地球研が取り組んでいるプロジェクトを主な素材としつつ、「地球環境問題とはいったい何なのだろうか」ということを伝えようとするものです。地球環境問題を、子供たちに語る立場にある大人のためのテキストとして出版したものともいえます。内容は、子供たちに一見真実だと思われることも疑ってみよう、自然も人も思いもよらないリアクションをするらしい、そして、環境問題って結局は人間自身の問題のようだ、という三つのメッセージを伝えようという構成になっています。執筆陣は地球研プロジェクトのプロジェクトリーダーが中心ですが、プロジェクト個々の成果ではなく、地球研として地球環境問題をどう考えるかというスタンスで語ってもらいました。地球研としての考え方を伝える初の一冊だと言えるでしょう。(中尾正義)



## 国際シンポジウム「水と人間生活」 11月6—8日

前号でもお知らせした、地球研の第1回国際シンポジウムがもうすぐ開幕です。「水と人間生活」(Water and Better Human Life in the Future)をテーマに、11月6日(月)—8日(水)、国立京都国際会館で。

6日は演奏会や映像をまじえた公開の講演会。7日に第1セッション「水のアンバランス」、8日に第2セッション「水をめぐる人間と自然の相互作用環境」。ポスターセッションや写真コンテストの発表もあります。

問い合わせ・参加申し込みは、地球研・研究協力課国際交流係(電子メール: [kokusai@chikyu.ac.jp](mailto:kokusai@chikyu.ac.jp))へ。地球研ウェブサイトもご覧下さい。

## 公開講演会「水と未来可能性」 11月6日

国際シンポジウムの初日は、「学問と芸術の共同」をうたう公開の催しです。ゴードン・ヤング博士(ユネスコ世界水評価プログラム・コーディネーター)と日高敏隆地球研所長の講演とともに、長岡京室内アンサンブルの演奏や映像ショーを計画。松平定和・NHKアナウンサーの司会で、11月6日(月)午後1時半—5時、国立京都国際会館イベントホールで。参加無料です。

## 写真コンテスト「いのちの水」

国際シンポジウム「水と人間生活」にあわせ、地球研では写真コンテスト「いのちの水」を催します。国や地域を

問わず「水と人」が関係する写真を募集(10月1日締切)。プロの写真家などによる審査で、地球研大賞や準大賞、優秀賞、入選を選び、国際シンポジウムの会場にて展示します。

## 地球研市民センター

地球研市民セミナーを次のように催します●10月20日(金)、谷口真人助教授「大地の下の"地球環境問題"」●12月1日(金)、内山純蔵助教授「『景観』は生きている」。いずれも、午後5時半—7時、地球研・講演室で。

## 「人と水」連携塾

人間文化研究機構の連携研究「人と水」メンバーによる公開講座(有料)が9月から来年2月まで、毎月1回開かれています(会場は、京都市上京区の新島会館)。この連携塾第1期は、京都を中心とした「人と水」の歴史、民俗、文化、食などがテーマです。

問い合わせは、地球研の事務局(電子メール: [m-nishi@chikyu.ac.jp](mailto:m-nishi@chikyu.ac.jp))へ。

## 上賀茂だより

「長岡京」結成10周年記念コンサートが7月、満員の長岡京記念会館で。森悠子さん率いる若手演奏家たちのアンサンブルに酔いました。

今秋は地球研国際シンポに登場し、学問とのコラボレーション。ご期待を。  
(斎藤)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
総合地球環境学研究所報 [地球研ニュース]

## Humanity & Nature Newsletter No.4

[隔月刊]

ISSN 1880-8956

発行日

2006年10月1日

発行所

総合地球環境学研究所

〒603-8047

京都市北区上賀茂本山457番地の4

電話: 075-707-2100 [代表]

Eメール: [newsletter@chikyu.ac.jp](mailto:newsletter@chikyu.ac.jp)

URL: <http://www.chikyu.ac.jp>

発行

総合地球環境学研究所 広報委員会

委員長

秋道智彌

編集

総合地球環境学研究所 地球研ニュース編集委員会

協力

[株]シー・ディー・アイ

本紙の内容は地球研のウェブサイトにも掲載しております。

郵送を希望されない方はお申し出ください。

表紙写真—

トルコ・セイハン河の灌漑地にて

[撮影: 長野宇規]